



# 月刊 千葉労働

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番  
(公) 043 (222) 7207 番

'97 4.17 No. 4382.

# ますます 深まる JR 総連崩壊の危機

(日刊四五七八より続く)

JR東労組長野地本、新潟地本における、旧鉄労系からの執行部批判に続き、二月一五日に開かれたJR東労組東京地本第一八回定期委員会において、革マル系の委員と執行部の間においてこんなやりとりがあった。

## 革マルに「タリマン」者 は出せよとせむぬ?

(委員の発言)

「〇〇元副委員長が大塚駅長になると聞いてビックリしている。これは事実なのか、彼は九五年の九・一五秘密会議に出席した三人組の一人だ・・・」

「ブラックユニオン、長野「虫下しの会」も、まちがいでなく一部会社幹部がからんでいる。東京も無縁ではない。会社の労務政策が変わったのかどうかについて、地本として会社にものを申しもたいたい・・・」

これは、九五年九月の旧鉄労・旧社員労グループの会議に参加して責任を追求された、元JR東労組東京地本副委員長が、今回の人事異動で大塚の駅長に発令されたことに対するもので、「〇〇副委員長の処遇は栄転であり、組織破壊の先兵がこゝまで出世するのか・・・」と、執行部の責任を追求した。

## 結託体制を守る

## 「走狗煮らる」

これに対して、地本書記長の革マル・石川が総括答弁の中で執行部を代表して自己批判を行った。「元東京地本副委員長の〇〇が大塚の駅長になるのを地本は知っていたのか。組織破壊をやった者が出世できるのか。会社の労政は変わったのか。それに対して地本はものを申したのか、ということでした。なおかつ専従をやれば出世できるのかという点も専従役員の在り方として問われました。地本執行部を代表して自己批判します」と、

この「自己批判」を受けて、地本委員長の革マル・加藤は、松崎や他の革マルに「償い」をするのか、ことさら「闘う」ことを強調して、自らの本音をあけすけに語っている。曰く、「労政が変わったのかといわれませんでした。変わったかどうかはわからないけれど、現段階の労使関係をしっかりと築き上げていくために闘う以外にないんです」と「現段階の労使関係」 松田を始めとするJR東日本の会社幹部とJR東労組・革マルの結託体制を守るために「闘う」ということ。勿論、「組合員の利益を守るため」ではなく、「革マルの利益を守る」ためであることは明らか。また、同じJR総連の貨物労、西労、東海労などをこれを守ったためのスケープゴートとして使うということだ。

## 「走狗煮らる」 に怯える革マル

こうも述べている、「以前本社の人事課長をやっていた人が、東日本会社を退職して西日本にいったそうです。この人はこの間、JR連合とかブラックユニオンをつくっていた張本人です・・・そういう人脈が東日本にもあるんです。そういう連中が会社の中核にいるかもしれない。だとすればどうするかというところが同時に問われます・・・労政を変えろとそういうことを意図する連中が蠢いている」 使い捨て、「走狗煮らる」に怯える革マルの心情むきだしで、疑心暗鬼にこりかたまっているわけだ。

## JR総連・ 革マル打倒は

「この一〇年間頑張ってきた人たちと一緒に断固闘いを進めなければならぬ」この中身も無論、革マルと当局との結託体制を守るために、松崎の発言に象徴される、「この東日本労使関係というのは一年前に完全に破壊されたんだと、こういう怒りに・・・だから私は松田を守れ」というものだ。ゲシユタポとはよく言ったもので、これはヒットラーの親衛隊のことだ、労働組合は「社長」を守るのではなく、労働者を守るものではないのか。「松田を守れ」「松崎を守れ」「革マルを守れ」「東の結託体制を守れ」、そのためには「国労解体だ」、組合員は犠牲になれ、貨物や東海、西、九州は犠牲になれ、これがJR総連・革マルのやっていることの全てだ。今や、JR総連・革マル打倒は天の声である。

## サークル協・家族会共催 動労千葉ボウリング大会

と き 四月二十六日 (土)

と ころ アサヒボウル

(京成千葉中央駅すぐ)

集 合 十一時現地集合